

# 地域資源を活かしたアート系ワークショップの創出

—共同研究「ENIWA学」におけるカリンバ遺跡を題材にしたベンガラ染め体験を事例に—

笠見 康大・加藤 裕明・西野 美穂・吉岡亜希子・小山田 健

**抄録：** 地域文化創造プロジェクト「ENIWA学」（共同研究）は、文化活動を通じた地域創成の在り方を研究する実践的研究である。今回は、大学と隣接する文化遺産「カリンバ遺跡」（国指定遺跡）をテーマとし、持続可能な地域社会の実現にむけて地域と交流することをふまえ、ワークショップを通じて地域創成にかかわる遺跡のデザイン化を目指した。本稿では、縄文後期の「カリンバ遺跡」を象徴するベンガラ朱を活用したワークショップの創出過程を明らかにし、本ワークショップの意義をアクションリサーチと参与観察、そして質問紙調査、さらには画像資料をもとに考察した。ワークショップの題材設定では、まず「協同で成される」こと「一過性でおわらない」ことを念頭に置いた。また、主題については、染色家の橋内美貴子や本学学生の協力を得ながら検討した。そして、材料についての理解を深めながら参加する児童の発達段階も考慮した内容となった。制作過程の考察から、ワークショップが「オープンエンド」で「抽象的な行為主体」、そして「未知な体験」としての活動であることが、参加者の地域文化活動への参画をポジティブなものにし多様性が重んじられる時代の持続可能な地域づくりにとって必要であることを示唆した。また、制作後の参加者の様子や、恵庭市社会教育委員の発言から、地域資源を活用した表現活動が今までにない形でベンガラ朱が可視化され、知識的な理解を超えて感性的な次元での共感に繋がったことが示唆された。

**キーワード：** 地域資源、アート系ワークショップ、カリンバ遺跡、ベンガラ朱、ENIWA学

## 1. はじめに：本研究の目的

本稿の目的は、地域創造プロジェクト「ENIWA学」（共同研究）が企画し、恵庭市郷土資料館と連携し開催した「ベンガラ染め体験」ワークショップを対象とし、地域資源を活用したアートの創出過程を明らかにすることである。「ENIWA学」とは大学が所在する恵庭市の土地と歴史、そこに生きる人間と文化を対象とし、それらの関係を、過去・現在・未来のありようから考察する地域学である。北海道文教大学の教員と学生有志で始まったENIWA学は、2019年度、平田オリザを迎えた講演会（本学記念講堂）、ワークショップ（恵庭市民活動センター〈えにあす〉）、地域調査をもとにしたKJ法ワークショップ（本学）からはじまった。2020年度には、30年前に恵み野小学校の子どもたちと担任の吉弘文人氏によってまとめられた『漁川物語』を、本学学生と共に朗読劇によって舞台化した活動（えにあす）、地域と芸術文化に関する公開研究フォーラム（本学記念講堂）、そして2021年度には、「風と大地の芸術祭」（島松夢創館）等、リサーチと演劇的手法をベースに地域社会における文化活動に関する研究を行ってきた。

今回のワークショップの実践では、大学と隣接する文化遺産「カリンバ遺跡」（国指定遺跡）をテーマとし、地域創成にかかわる遺跡のデザイン化を目指した。具体的には、遺跡を象徴するベンガラ朱を用いたワークショップ（造形体験）を企画した。ここでいう「ベンガラ朱」とは、赤色顔料のこと

である。縄文時代人がしばしば墳墓や土器や木器を着色したことで知られる顔料である。現在でも土中から比較的容易に採取される。その成分には、天然の赤鉄鋼、酸化鉄あるいは鉄バクテリアが生成するパイプ状ベンガラがある（パリノ・サーヴェイ〈株〉2019：261-263.）。

カリンバ遺跡に代表される漆塗り櫛の着色顔料にもこのベンガラ朱が用いられている。現在でも、カリンバ自然公園内で採取可能である。が、その成分に関する詳細な分析は今のところない。笠見と加藤は2021年7月13日、郷土資料館職員（主査・学芸員）の長町章宏氏立ち合いのもと、埋蔵文化財センターにおいて、カリンバ遺跡で採取されたベンガラ朱の塊を見せていただいた。幼児の握りこぶし大のものが二点、タッパーに収められていた。鮮やかな朱色は、ベンガラ朱が3000年の経年変化にも耐えうるものであることを実証していた〔活動記録20210713〕。カリンバのベンガラ朱は、かつて恵庭に生きた縄文人の彩色を、現代人も追体験できる「モノ」である。本ワークショップは、このベンガラ朱（「モノ」）を、現代に生きる私たちそれぞれの「自分事」とできるよう、「コト」（事＝ワークショップ）と「バ」（場）を介して「ヒト」を交流させ、地域の将来の活力につなげることが主な目的である。本研究は、以上のワークショップの創出過程を明らかにし、その意義を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究の方法は、以下三点を組み合わせで行う。第一、アクションリサーチである。筆者らは、本ワークショップを実施する実践者であると同時にその創出過程を記述し、分析する研究者である。実践の計画・実行・観察・省察という四つのサイクルを循環させ、実践と研究を相互に改善していく研究手法としてこのアクションリサーチを採用する（シュワント2019：2）。第二、参与観察法である。アクションリサーチが、活動に関与しながら実践の反省と向上を目指していくのに対し、参与観察法は、あくまで客観的に活動過程をフィールドノートに記述していく方法である。

以上の研究方法により本論を記述していく際、ふまえた記録は、「ENIWA学活動記録」である。「ENIWA学活動記録」とは、筆者ら共同研究者による実践の活動記録である。B5版大学ノートに、活動の日時、場所、記録者、活動参加者、活動目的、活動内容等が3列分かち書きの書式に記録されている。本研究では特に、加藤によるフィールドノートを採用する。

研究方法の第三として、質問紙調査を採用する。本研究ではワークショップに参加した幼児を除く市民8名と本学学生6名及び郷土資料館職員3名の計17名に、匿名及び任意のアンケートへの回答を依頼した。主なアンケート項目は、今回のようなアート系ワークショップによって、①「地域における文化の創造について好ましい変化を生むと感じますか」、②「その『好ましい変化』とは、特にどのようなものでしょうか」、③「今回のような企画があれば、また参加したいと思われませんか」、④「今回のような企画で、カリンバ遺跡への関心が高まりましたか」、⑤「他の参加者（市民、学生、職員）たちと交流などはありましたか」というものである。市民と職員には郵送により、また学生にはグーグルフォームを用いてWEBにより回答を依頼した。回答者に対しては、研究会での発表や論文に使用させてもらうこと、実際に引用する際には仮名を用いることをアンケート用紙の冒頭に明記した。回収率は17名中14名（市民6名、学生5名、職員3名）、82.3%であった。

以上三点の研究方法を組み合わせ、本論を記述していく。記述にあたっては、笠見・加藤・吉岡・西野・小山田と事実経過の確認、及び笠見と学生が撮影した画像記録の確認を行いながら、アート系

ワークショップの創出過程を記述した。

なお、特に記述の根拠を示す際は、アンケートであれば〔質問紙〕とし、そのあとに上記項目ナンバーを付す。また、「ENIWA 学活動記録」なら〔活動記録〕とし、8桁の数字を付し、記述の日時を示す。例えば、2021年8月21日の「活動記録」ならば、〔活動記録 20210821〕という如くである。

### 3. ワークショップの背景

大学と隣接する「カリンバ遺跡」は1999年に発掘された縄文後期末の遺跡である。複数の合葬墓が見つかるなど、墓域を伴う集落が営まれた遺跡で、2005年に国の史跡に指定されているほか、合葬墓からは多量の漆製品が出土しており、それらの装身具は2006年に国の重要文化財に指定されている。

漆製品の櫛・腕輪・額飾り・腰帯などは、朱を中心に深紅やオレンジ、ピンクなど豊かな色彩を現代にも伝えている。漆塗りの帯は全国で4点しか発見されておらずそのうちの2点がカリンバ遺跡から出土したものである（残り2点も恵庭市内の別の遺跡から出土している）。また、恵庭では縄文時代の結歯式<sup>1)</sup>の漆塗り櫛が100点以上出土しており、その数は全国の4分の1<sup>2)</sup>を占めていることから、当時の恵庭は文化交流の中心的な場だったのではないかと推測できる。

このように、全国的に見ても珍しい文化遺産であるが、発見されてから20年経つ現在においてもカリンバ遺跡現地には、野原に看板が立っているのみである。また、適切なガイダンス施設がないため全国的に有名な漆塗り櫛についても、そのレプリカを現地からは離れた市の郷土資料館で小さく展示しているのが実情である。実物は、さらに離れた恵庭市教育委員会埋蔵文化整理室（旧恵庭浄水所）に厳重に保管されている。笠見と加藤が、漆塗り櫛の実物を見たことは先にも述べたが、他の地域で発掘された漆塗り櫛よりも色彩にくすみ無く瑞々しい印象を受けた。

このような状況ではあるが、2016年には恵庭市教育委員会が『史跡カリンバ遺跡整備基本計画書』をまとめている。計画書では「運営及び体制等」について「市民の理解が不可欠」であり、「史跡の保護と活用には地域住民の参画が不可欠」として町内会やカリンバの会、ボランティア団体の参画による地域への愛着心を醸成できる運営方法を検討する方向で整備計画が進められている。しかし、地域住民が参画した活動は遺跡のまわりに花を植える活動に留まる。また、その活動も市民団体の高齢化により継続が難しくなっているのが実情である。

そこで、カリンバ遺跡を象徴するベンガラ朱を使った染め物のワークショップを通して地域住民に感性的な次元においても遺跡の魅力が伝わる方法を模索した。その試みとして、市の郷土資料館の協力のもと同館で毎年行われている「カリンバまつり」においてワークショップを開催することとした。2021年度はコロナ禍で開催が危ぶまれたが、非常事態宣言の合間を縫い、8月21日（日）、なんとか開催することが出来た（図1）。

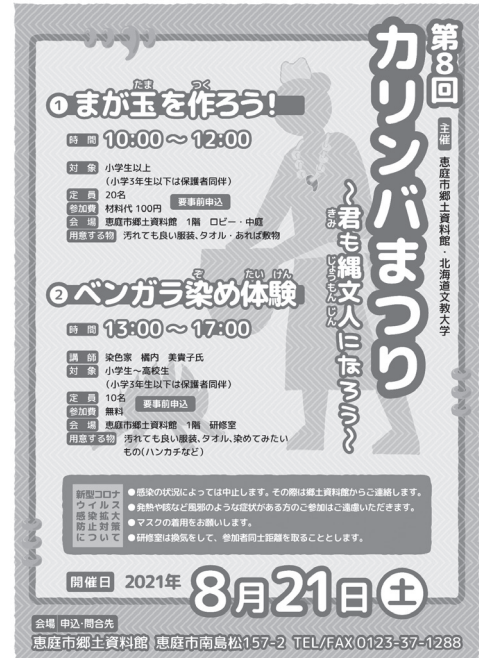


図1 カリンバまつりポスター（恵庭市郷土資料館作成）



## 4. ワークショップの設計

### 4.1 題材の設定

ワークショップの題材設定においては、地域文化活動への参画をねらい、①「市民との協同によってなされる」こと、②「一過性で終わらない」こととした。また、参加者に持ち帰ることのできるものを作って終わるだけでなく、学生、郷土資料館職員（以下、職員）そして市民との協同で制作する機会とするため、10メートルの布を10本用意した。協同で制作した染め物は郷土資料館での展示や10月に開催した「風と大地の芸術祭」で展示し、地域住民が制作したものを地域住民が鑑賞できるようにした。また、コロナ禍での制作活動になるため参加者の人数を10名とし、その人数でできる活動内容を検討した。また、染め物に使うベンガラは大量に必要なため市販された既成のベンガラ染め液を使うこととした。そして、カリンバ朱の鮮やかさを表現するために2種類の蘇芳すおうと茜あかねを用意することとした。

### 4.2 主題の設定

2021年度で第8回目を数える恵庭市郷土資料館の「カリンバまつり」（図1）は、これまでは、職員が講師となって「土器作り」「石器づくり」「勾玉作り」を中心に行うワークショップであった。これらはいわば、3000年前の過去を追体験するための活動である。笠見と加藤は、地域の歴史や固有性を生かした「追体験」ではなく、現在そして未来を「表現」するワークショップはできないものかと議論した〔活動記録20210705〕。博物館等で行うワークショップとアート系のワークショップとの違いは主に、その本質が、「模倣」（過去の追体験）であるのか、「創造」（いまはないものを生み出す未知の経験）であるのかの違いである。いま、その違いを図2に示す。

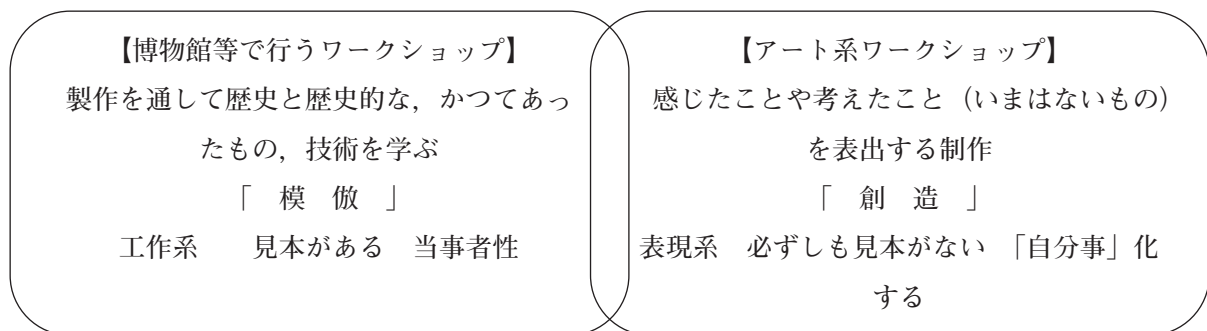


図2 ワークショップの違い

主題の検討は主に、笠見、加藤に染色家の橘内美貴子を加えて行った。橘内を迎えた検討会は2021年7月6日と8月3日、北海道文教大学7号館3階造形教室で行った。橘内からは主に染色に関する方法と材料について助言をもらった〔活動記録20210706、0803〕。

その他、学生と筆者（笠見）は、8月6日に教材研究を行い、ワークショップの参加予定者である小学生児童の発達を踏まえた学生の参加方法について検討を行った。また、ワークショップの主題の検討については、染色のできる表現の可能性から実施場所の環境や参加者の発達段階、共同のあり方等について展開していった。以下は、笠見、加藤と橘内、学生と検討したワークショップの主題内容である。

### 【主題の検討案 1】「新聞紙を使った型染め」案

検討案 1 は、最初にカリンバを象徴する遺物の型を用意し染めるというアイデアである。しかし、参加者は、制作中にどのような模様になるのか、その結果がわかってしまう。そのため、参加者にとっては表現ではなく、作業になってしまう可能性がある。

そこで、笠見は参加者に主体的に表現してもらうため、「3000 年前の遺物が発見されたカリンバにちなんで、3000 年後に残るもの、あるいは残って欲しいもの」を想像してもらうという案を出した。が、参加者が限られている中で実施するのは時間的にも空間的にも難しさがあると判断した。また、10 メートルの布を染めるにはかなりの労力が必要になる。特に参加者が子どもである場合、体力的に負担となることから、検討案 1 は却下した。

### 【主題の検討案 2】「泥染め」案

「泥染め」案は、既成のベンガラを使って染色するのではなく、カリンバ遺跡とその周辺の土を使った染色は出来ないかと検討したものである。この方法の意義は、地域資源を活用したアートの創造であること、参加者の、地域に対する「愛着形成」に寄与するのではないかと考えた。

そこで、大学周辺の土 2 種類と、郷土資料館より譲り受けたカリンバ遺跡発掘時に掘削した土を使って顔料を作成してみた。

どちらも乳鉢で細かくすり潰した。郷土資料館から譲り受けた土に関しては電気釜を使って 800 度で 15 分焼成した。大学の土を使った顔料に、固着剤であるバインダーを混ぜると色が濃くなった。が、乾燥すると採取時の土の色になった。焼成した遺跡の土は少し赤みを帯び肌色に近い顔料となった。しかし、土を使った顔料は見た目が朱色に比べて象徴性に欠けることやバインダーを使っても顔料を布に長く定着させるのは困難であると判断した (図 3)。

実は、北海道文教大学に隣接する史跡カリンバ遺跡公園内の湿地には、ベンガラが堆積している。それを採取し、染料とすることも検討したが、先述したように、幅 1.1m、長さ 10m の布を 10 本染めるほどの量は抽出できない。またどうしても茶色の土や不純物が混じるため、焼成しても、鮮やかさに欠けてしまう。以上から、地元の土及びベンガラを採取し、顔料とすることは断念した。

### 【主題の検討案 3 - 1】「折り染め」(決定案)

「折り染め」とは、布を折りたたみ、1.1m の幅を 4、5 回折りたたむことで狭くし、その上からベンガラを含ませた筆を思い思いにおいていく、という技法である。織り込まれた内側にもベンガラが浸透し、広げた時に意外な模様が出来るという楽しさがある (図 4)。しかも、限られた空間と時間、参加者の中で、一番取り組みやすい方法である。幼児造形教育でも絵具遊びの中で取り上げられており、だれに対しても心理的ハードルが低い。参加者それぞれが思い思いに関わるのできる方法である。また、布を広げるまで全体像がつかめないのも魅

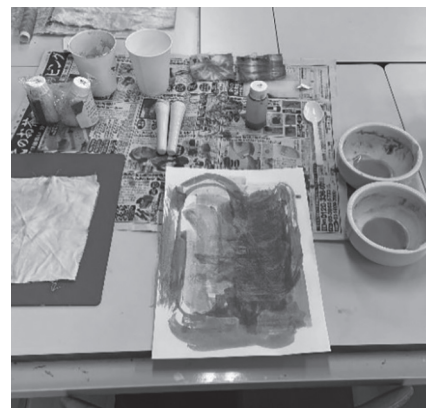


図3 泥染め

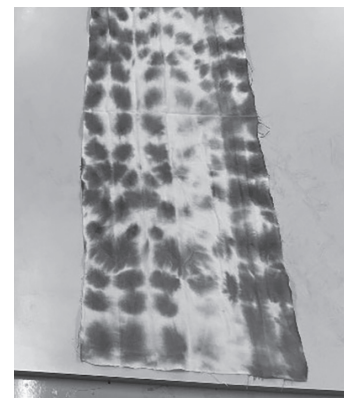


図4 折り染めを開いたところ

力である。

染め物を乾かす場所についての検討から、資料館屋外に隣接する林で作品をインスタレーションとして展示する案となった。加藤と橋内で現場での確認を行い実施することを決定した（図16-17）。

### 【主題の検討3-2】ベンガラを布に固着させる方法の検討

橋内のアドバイスにより、ベンガラを布に固着させるバインダーとして豆乳を候補とした。そこで、豆乳を使う場合と使わない場合の差を検討した。図4の右側が豆乳を含んだ布である。使用する市販のベンガラはすでに染めもの用に調整されており、豆乳などのバインダーを使わずにそのまま染めることができるが発色の良さを考慮して豆乳を使用することにした（図5）。

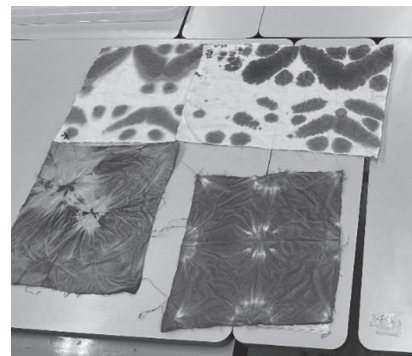


図5 固着実験

### 【主題の検討4】「絞り染め」方法の検討

ワークショップでは、10mの布染め共同制作の前に、参加者がめいめい持ち寄った任意の布を染める活動を設定した。その際は折染めだけでなく様々な染めの技法に親しんでもらう観点から、絞り染めの検討も行った。絞り染めの検討は、参加者として小学生も対象にしていることから、将来小学校教員を目指す3名の大学生（4年生）の協力を得て行った。

絞り染めは輪ゴムやタコ糸を使って布を縛ってから染める技法である。タコ糸に比べて輪ゴムは柔らかいので扱いやすいと考えたが、実際に検討したが布を押さえながら別の手で輪ゴムをかけ、引っ張り、捻るなど手指の複雑な操作が必要であることがわかった。指先が十分に発達していない子どもには難しいのではないかとも思われたが、経験としてやってみるもののほうが児童の学びになると考えた。また、参加者の児童1人に対して、学生スタッフも十分に支援できると考えた。絞り染めは、表現が多様に変化し誰でも楽しめる活動であることを確認し、ワークショップに取り入れることにした（図6、図7）。



図6 学生による絞り染め

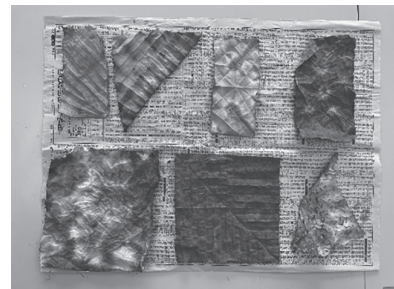


図7 絞り染め

## 5. ワークショップの展開

### 5.1 実施概要

タイトル：「ベンガラ染め体験」（恵庭市郷土資料館と北海道文教大学共同研究 ENIWA 学の共同開催「第8回カリンバまつり」の一環）

実施日：2021年8月21日土曜日13時～17時

場所：恵庭市郷土資料館 1階 研修室

参加者：9名（保護者4名、幼稚園年長児1名、小学校1年生1名、2年生1名、4年生1名、5年生1名の子ども計5名）



スタッフ：講師1名 大学生6名 郷土資料館職員3名 教員3名（笠見・加藤・西野）

材料：ベンガラ「古色の美 泥染め」蘇芳・茜の2色 布「天竺木綿」1.1m×10m 10本

内容：前半：参加者各自が持ち寄った布を用意された座席で染めていく。（60分）

後半：10分の休憩をはさみ、共同制作を行う。床に固定したブルーシート（図7）の上に、10mの布を広げ、折りたたみ、参加者全員で染めていく。染め終わった後は、順次、隣接する林へ移動し、樹木に固定し、木と木を繋ぐように展示する（図16, 17）。

## 5.2 環境設定

環境設定は8月21日当日の午前10時半より行った。大学教員（笠見、加藤、西野）と橋内、そして職員3名で自己紹介を行い、今回の活動の主旨と流れの確認を行った。

会場は約10坪の研修室で、床にブルーシートを敷きズレを防止する養生をほどこした。参加者はコロナ禍により10名に限定した結果、保護者と子ども合わせて9名であった。長机に家族と一緒に座れるように配置した。コロナ禍での活動ということで机と机の間隔をできるだけ開けられるように机は左右の壁に寄せ、真ん中に通路を設けた。この通路があることで、学生が子どもたちに寄り添いながら、活動の支援ができるようになった（図11）。

共同制作で使う10メートルの布は、まず半分（5メートル）に折り、その後の折り方は、学生スタッフに任せた（図8）。折った布を豆乳に浸してみたが、大きいためなかなか中まで染み込まず時間を要した。そのため、本番までに豆乳に浸しておくこととした（図9）。



図8 10mの布を縦に半分に折る



図9 豆乳を布に沁み込ませる

## 5.3 折り染めの展開

ワークショップを開始するにあたり、まずプロジェクトリーダーの加藤がENIWA学の趣旨説明を行った。次に、ベンガラについて笠見が簡単な説明をし、最後に講師の橋内が、絞り染めの方法と、豆乳の役割についてサンプルを使いながら、子どもたちにわかりやすいように説明した（図10）。

前半（1）の活動では、参加者が持ちよった布を使った。まず、豆乳に浸し、次に輪ゴムやタコ糸を使ってそれぞれ布を縛っていった。縛り終わった人から染めたいベンガラを選びトレイに移して染めていった。筆者らは、何回でも染め物ができるようにハンカチサイズの綿布を用意していたところ、子ども



図10 橋内による説明

たちは全員、2枚目3枚目にチャレンジした。家族や友達にプレゼントするという子どももいた。親と子で絞り染めを比べると、きつく絞れる親の方が白抜き部分がよく出ているのが確認できる（図

12). 約 30 分後、予定より早く各自の染め物が終了したので、10 分間の休憩を入れた。休憩の間に、スタッフは共同制作の準備を行った。スペースに限りがあるので、まず 10 本中 5 本の布を染めることにした。

後半 (2) の活動についても、開始前に講師の橋内が説明を行った。共同制作の染め物は筆でやることを参加者に伝え、子どもたちにもわかりやすく、かつアートの質を保証する観点から、例えばアニメのキャラクターやマーク等の既存のイメージに頼らずに線を引いてみることを促した。ベンガラ液はコップに入れ必ず手で持って制作するよう伝えた〔活動記録 20210821〕。

説明が終わると、子どもたちは空いているスペースにそれぞれ移動していった。最初は筆づかいもおそろおそろという感じであった子どもも、次第に大胆に筆を動かしていった。総じて子どもたちは、ベンガラの染まり具合を確かめながら、集中して筆を使っている様子が見られ、学生がサポートする必要はほとんどなかった（「北海道新聞」2021 年 8 月 25 日）。子どもたちはひたすら布に向かい、筆を動かした。途中で飽きてしまうことが心配されたが、そのような子どもはいなかった。加藤の活動記録には「5 歳の男の子もすぐに 10m の布のかたわらにすわり気合十分」という記述が見える〔活動記録 20210821〕。

橋内の促しにより職員 3 名も制作に参加することになった。彼らは職員としてのサポートのみならず、自らアートの制作者となり、「自分事」として作品制作に向かった。子どもも、大人も、立場や年齢を超えてアート制作に集中し、楽しみながら布とベンガラに向かった (図 13)。

一方、大学生もまた作品づくりに没頭した。染めた布を広げるまで完成形が分からないという未知なるものへの挑戦ともいうべき姿勢が看取された。それは、例えば、制作中の学生同士の対話の中で、「もっとこうしたらいい (面白くなる) んじゃないか」、「ぐちゃぐちゃにやってみよう。…いやだ?」というような言葉〔活動記録 20210821〕に示されている。

さらに学生たちは、ワークショップ参加者が帰宅した後も、



図11 子どもに寄り添いサポートする学生



図12 参加した親子



図13 共同制作の様子 (恵庭市郷土資料館撮影)



図14 学生の取り組み



残った布のうち3本の染色に向かった。今回が初対面という関係性も含まれる中で、お互いに言葉を交わし、確認しあいながら制作する姿が看取された。布に手形をつけたり、靴を脱いで足で色を着ける学生もいた(図14)。また煮豚を作るかのように丸めた10mの布をタコ糸できつく縛り、そこにベンガラ液を流し込むペアもいた(図15)。これらの活動は誰かの指示によるものではなく、学生個々人の主体的で、協同的なアイデアによる活動であった。参加者が主体的に、また他の参加者との交流によって10mの折染め作品が生まれた。質問紙⑤「他の参加者(市民, 学生, 職員)たちと交流などはありましたか」に対して、「ア とてもよくあった」という回答は14名中9名、「イ まあまああった」が同3名、「ウ あまりなかった」が同2名、「エ ほとんどなかった」は同0名であった。



図15 煮豚のように布を縛る学生

#### 5.4 屋外のインスタレーション

筆者らは、10mの布を染め終わったグループから、順次、郷土資料館屋外に隣接する林に行くよう促した。作品をインスタレーションとして展示するためである。布の両端には、それぞれ3.3cm四方の角材が通してある。その両側には、穴をあけ、ハリガネを通せるようにしてある。参加者は、互いに10mの布の端を持ち、丁度よさそうな樹木の幹を選び、バインド線で固定した。布は樹木と樹木を繋ぐように展示された。(図16, 17)。布



図16 林の中を走り回る子どもたち

を広げると、目の前に想像を超えたイメージが広がったためか、参加者のあいだからは、声を出して感動している姿が見られた。ある子どもは「わっしょい、わっしょい」と叫びながら、布の間を走り回っていた〔活動記録20210821及び図16〕。

よく晴れた夏の日の午後、協力しながら染めた布を広げると、夏の樹々の色にベンガラの朱色が映えて、室内で見た時よりも鮮やかに感じられた(図16)。

インスタレーションの前で参加者全員の集合写真を撮り、閉会のスピーチを職員の長町章宏氏が行った。その中で、「この土地でベンガラを使用した活動は3000年ぶりではないか」という言葉があった。その後も参加者たちは残って写真撮影をしていた。

アンケートによれば、今回のワークショップにより、①「地域における文化の創造について好ましい変化を生むと感じますか」という問いに対し、「ア とても感じる」が14名中11名、「イ まあまあ感じる」が同3名だった。また、②「その『好ましい変化』とは、特にどのようなものでしょうか。選択肢からひとつ選んでください。」という問いに対しては、「ア ベンガラ染色作品が生まれたこと」を選んだ回答が14名中4名、「イ ベンガラ染色作品を野外や資料館内に展示したこと」を選んだ回答が同1名、「ウ アーティスト(染色家)との交流が生まれたこと」を選んだ回答が1名、「エ 大学生と市民との交流が生まれたこと」を選んだ回答が同5名、「オ 郷土資料館の活気が生まれ

たこと」を選んだ回答が同2名、無回答（無効）が同1名だった。

また、③「今回のような企画があれば、また参加したいと思いますか。」という問いに対しては、「ア とても思う」を選んだ回答が14名中10名、「イ ある程度思う」が同2名、「ウ 少し思う」が同2名、「エ 思わない」は0名だった。

さらに、④「今回の企画で、カリンバ遺跡への関心が高まりましたか」という問いに対しては、「ア とても高まった」が14名中4名、「イ ある程度高まった」が同6名、「ウ 少し高まった」が同4名、「エ 高まらなかった」が0名だった〔質問紙①②③④〕。

参加者が制限されたコロナ禍の開催であったので、そもそもサンプル数はわずかである。が、今回のアート系ワークショップによって、市民・学生・職員の間には、ベンガラ朱による染色作品の制作を媒介とする協働と、地域文化資源（カリンバ遺跡、ベンガラ朱、郷土資料館等）に対する関心の高まりが看取された。屋外インスタレーションは、その日のうちに取り外し、郷土資料館館内中央のらせん階段に沿って、2階天井から一階床面にまで、計3本を吊るし、展示した。郷土資料館への来場者が、できるだけ多く鑑賞できるよう、9月末まで展示した<sup>3)</sup>。2021年12月10日、恵庭市社会教育委員会において、資料館館長の高畑が「ベンガラ染めは今までにない活動であり、大学と郷土資料館が共同開催したことで、カリンバまつりも、より大きくその幅が広がった」と述べた。また、委員の太田は「大学生と恵庭の子どもが、郷土資料館でつながったことでとてもすてきな活動になった、これかも継続してもらいたい」と述べた〔活動記録20211210〕。



図17 林の中のインスタレーション

## 6. 考察と課題

以上、地域資源を活用したアート系ワークショップの創出過程を記述してきた。以下に本ワークショップに関する実践研究の成果を三点にまとめる。

第一、10mの布を染める共同制作過程では市民（子どもと保護者）、学生、職員という社会的属性や序列を超え、それぞれが主体的に制作に取り組む姿を明らかにしたことである。

これらの姿は、本活動がオープンエンドな題材であり、抽象的な行為主体の活動であったためであると考えられる。「答え」が無い状況から、未知なものを生み出す創造へと筆を走らせていく行為主体の活動がそこにある。それは、予測困難な時代を生きる「生きる力」につながる可能性がある。

第二に、地域資源を題材としたワークショップ（コト）への参加者が、日常生活における役割をいったん解除し、ヒトとヒトとが対等に会おう場を生み出し、異質な者同士の協同に向かう姿を明らかにしたことである。

第三に、北海道恵庭市のカリンバ遺跡の特色であるベンガラ朱（モノ）を一市販のものではあるが一用いて、布に染め上げ、アートとして市民の前に可視化できたことである。今回のワークショップを通して、3000年前の色であるベンガラ朱を可視化することでその美しさの価値に市民が触れることのできる機会を創出した。

一方で、本実践研究の課題として以下二点があげられる。第一、研究開始当初、筆者らは、地域資源を生かしたアートの創造を行うことによって、地域の子どもや大人のあいだに「愛着形成」を生む一助になるのではないかという仮説を持った。だが、この点は、十分論証することは出来なかった。今回のようなアート系ワークショップに参加することは「身体化された文化資本」<sup>4)</sup>を育む観点からも意義がある。文化的に価値のあるものを、制作を通して「愛着」を持ち、「自分事」化していく経験は、未来の活力ある地域づくりの主体形成につながるものと考ええる。この点を明らかにすることが第一の課題である。

第二に、本ワークショップでは、単に、講師や教師の意図に沿って作業するだけの過程からは得られない、未知なるものの、しかも協同的な経験が参加者相互のあいだに生まれていた。しかし、参加者（市民〈子どもと保護者〉、学生、職員）相互の協同のより具体的なありようを浮かび上がらせることには不十分さが残った。この点が第二の課題として残る。

多様性と協同、共生が重んじられる21世紀の持続可能な地域づくりに向け、今後も地域資源を生かした文化活動を、市民と大学そして郷土資料館とともに探究していきたい。

## 注

- 1) 漆櫛の製作技法には、結菌式と刻菌式がある。刻菌式が櫛の素地である木台を刻み込んで製作するのに対し、結菌式とは、櫛の菌を並べて塑形、整形して製作する技法である。縄文文化の漆櫛としては結菌式が一般的である（小林 2008：1）。
- 2) 縄文の漆櫛は、2008年時点で全国で451点出土している。そのうち北海道恵庭市から出土したものは112点と計算される（小林 2008：26-27）。
- 3) ベンガラ染めの展示はその後、10月14日から恵庭市島松のホール夢創館で開催された「風と大地の芸術祭」に展示され、その後また郷土資料館に戻された。2022年1月現在も展示中である。
- 4) 「文化資本」とは、社会学者のピエール・ブルデューが提唱した概念である。広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を意味する。具体的には、家庭環境や学校教育、地域の公共図書館や博物館等を通して各個人のうちに蓄積される知識・教養・技能・趣味・感性などをさす。

## 文献

北海道恵庭市郷土資料館（2014）『国指定史跡 カリンバ遺跡 図録』

北海道恵庭市教育委員会編（2016）『史跡カリンバ遺跡整備基本計画書』

『北海道新聞』2021年8月25日付け記事「ベンガラ染め 縄文感じて」

加藤裕明、吉岡亜希子、笠見康大、鈴木敏正（2021）「大学における地域社会参画型教育—大学教育



改革プロジェクト『ENIWA 学』における朗読劇『漁川物語』上演を事例として一」（『北海道文教大学論集』No.22）

加藤裕明（2021）「地域におけるこどもの表現—授業『こども学原論』のために—」（北海道文教大学人間科学部こども発達学科 研究紀要「こども学の探求」第2号）

木村英明，上屋眞一（2018）「縄文の女性シャーマン カリンバ遺跡」新泉社

小林幸雄（2008）「縄文文化の透かし模様入り漆櫛とその技術」『北海道開拓記念館研究紀要』第36号，pp.1-36.

シュワント T.（伊藤勇，徳川直人，内田健訳 2009）『質的研究用語事典』北大路書房.

鷺田清一（2020）「素手のふるまい 芸術で社会をひらく」朝日文庫

リノ・サーヴェイ株式会社（2019）「土坑墓出土赤色顔料の成分分析」『つがる市遺跡調査報告書：史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書（11）』青森県つがる市教育委員会，pp.261-265.

## **Starting Workshops That Utilize Local Resources: A Case Study of the Bengala Dyeing Experience on the Theme of the Kalimba Site**

KASAMI Yasuhiro, KATO Hiroaki, NISINO Miho, YOSIOKA Akiko and OYAMADA Ken

**Abstract:** The regional development project "ENIWA Studies" is a practical joint research to study the process of regional development through cultural activities. The theme of this project was the cultural heritage site "Kalimba" (designated as a national site) adjacent to the university, and the aim was to design a site related to regional development through workshops while considering interaction with the region for the realization of a sustainable regional society. In this paper, we clarify the process of creating a workshop using the bengala vermillion, which symbolizes the Late Jomon "Kalimba site," and discuss the significance of this workshop based on observation and image data. In choosing the subject matter of the workshop, we took into consideration that the workshop should be "collaborative" and "not transient," and we also considered the developmental stage of the participating children to deepen their understanding of the materials with the cooperation of the dye artist Kitunai and our students. From the discussion of the production process, it was suggested that the workshop should be "open-ended," have "abstract actors," and "new experiences" in order to make the participants' participation in local cultural activities positive and necessary for sustainable community development in the future where diversity is valued. In addition, based on the participants' behavior after the production and the comments of the Eniwa City Social Education Committee member, it was suggested that the expressive activities using local resources led to the visualization of Kalimba Shu in a way that had never been seen before, and that it led to empathy on a level of sensitivity that went beyond knowledge-based understanding.